日本医史学雑誌第四十二巻第一号　平成七年　八月三十一日受付
平成　八　年三月二十日　発行　平成七年十一月十六日受理

『存真環中図』
―『史記』幻雲附標所引文からの検討

宮川浩也

一、はじめに

北宋の慶暦五年（一〇四五）、医学目的による人体解剖が行われた。二日間にわたって欧希範ら五十六人を剖き、宋景らの画工によって蔵府（臓腑）図が残された。こうして成った『欧希範五蔵図』は「北宋・南宋の間のころに伝存し、それ以後消息を絶」[1]っている。わが国の梶原性善の『頓医抄』（巻四四、以下巻数を略す）などにわずかに一図が残存しているだけで、諸書の記録とあわせても、『欧希範五蔵図』の内容についてはほとんど知ることができない。[2]

崇寧年間（一一〇二～一一〇六）には、楊介が、未完なる『欧希範五蔵図』を補正する目的で人体解剖を行い、蔵府図『存真図』を残した。のちに、経脈図を載せる『環中図』と併せて『存真環中図』と成るが、明末ごろには失伝している。

二つの出来事は「動物的・想像的な要素が多分にある中国伝統医学の解剖知識に比較すると、科学的・実証的なものとすべきで、中国医学に新生面を拓いたものと言うことができ」[3]ると一応の評価は与えられるが、観念的な蔵府説からどのように脱却したのか、それによって中国伝統医学はどのように転換したのか、これらを明らかにする上で貴重な記

録であるが、どちらも逸書となってしまって検討のしようがない。

ところが、渡辺は「頓医抄巻四十四は、楊介の存真環中図の全部を転載・直訳したもの」[4]といい、「今に伝存する頓医抄巻四十四には種々の欠点・混乱はあるが、それでも楊介の存真環中図の全貌を伝える唯一の書で、解剖史学上貴重な文献であり、その復原が要望される」[5]という。つまり『存真環中図』は『頓医抄』をもとに復原可能だという。この所説は大事なところで、換言すれば宋代の解剖学の空白を補うことができる。

しかし、『史記』扁鵲倉公列伝の幻雲附標を精査してみると、『頓医抄』にみえない『存真環中図』の文章が引用されていて、『頓医抄』と『存真環中図』の関係をあらいなおし、渡辺説が妥当かどうか再検討する必要が生じた。

本報では『頓医抄』と『存真環中図』の関係について明らかにし、『頓医抄』が『存真環中図』を丸写ししたものではないことを提言したい。

二、引用文の検討

米沢藩校旧蔵の南宋慶元黄善夫刊本は、かつて南化玄興の所蔵であったために「南化本」と呼ばれ、室町時代の月舟寿桂らのおびただしい注釈が施されている。[6]月舟寿桂（一四六〇～一五三三）は幻雲と号し、代表的な五山文学僧で、史記学を桃源瑞仙に承け、谷野一栢や竹田定裕などの医家とも親交があった。[7]この幻雲附標の引用医書は三〇余種に及び、逸書の研究のみならず、当時の医学を知る上でも貴重な文献といえる。[8]この幻雲附標から逸書の一つ『存真環中図』の引用文を、その内容から「序文」「存真図」「環中図」に分けて検討する。

（一）、序文の引用

序文の類は次の文が引かれるだけである。

「①政和三年洛陽賈偉節所作存真環中両図序云楊君介吉老以所見五臓之真絵而為図取煙蘿子所画條析而釐正之又益

之十二経以存真環中名之云〃　②楊介存真図云黄帝時医有兪附一撥見病因能割皮解肌湔浣腸胃以祛百病云〃宜賊欧希範被刑時州吏呉簡令画工就図之以謂詳得其状或以書考之則未完崇寧中泗州刑賊於市郡守李夷行遣医并画工往観決膜摘膏曲折図之得盡纎悉介取以校之其自喉咽而下心肺肝脾胆胃之系属小腸大腸腰腎膀胱之営畢其中経絡聯附水穀泌別精血運輸源委流達悉如古書無少異者政和二年　③又云宜州推官呉簡云凡二日剖欧希範等五十有六腹皆詳視之喉中有竅三一食一水一気互令人吹之各不相戻肺之下則有心肝胆脾胃之下者小腸小腸之下有大腸小腸皆瑩潔無物大腸則為滓穢大腸之傍則有膀胱若心有大者小者方者長者斜者直者有竅者有無竅者了無相類唯希範之心則紅而硾如所絵焉肝則有独片者有二片者有三片者腎則有一在肝之右微下一在脾之左微上脾則有在心之左至若蒙趕多病嗽則肺且損黒欧詮少得目疾肝有白点此又別内外之応其中黄漫者脂也此説於経不合仍又所図蔵象矣」

ひとつの文章だが、三つの内容に分けられる。

①政和三年（一一一三）の賈偉節の『存真環中図』の序文

②政和二年（一一一二）の楊介の「存真図」の序文

③『欧希範五蔵図』の編者呉簡の文

①②③は多紀元胤の『医籍考』に引かれている。『頓医抄』には③の文章だけが引用されていて①と②は見えないから、渡辺のいう「頓医抄巻四十四は、楊介の存真環中図の全部を転載・直訳したもの」とするのは誤りで、少なくとも二種類の序文は引用していない。

③の「又云」は「楊介存真図又云」の略であるから、呉簡の文章は「楊介存真図」からの孫引きということになる。つまり、幻雲は『欧希範五蔵図』は見ていないのである。

また②は「存真図」に政和二年に付され、翌年に『存真環中図』が成るにあたって①の賈偉節序が付されたということもわかる。

(二)、「存真図」からの引用

(1)蔵府図の引用

図1「欧希範五蔵図」

図2「五蔵正背図　正」

図3「背」

漢字が並べられていて厳密にいえば図とはいえないが、その理由を幻雲は次のようにいう。

「幻以紙窄不能写五蔵図、唯以字排列其位。咽喉人之所難弁、僅図其形而已。詳見存真図可考。(幻、紙の窄(せま)きを以て五蔵図を写す能ず、唯だ字を以て其の位を排列するのみ。咽喉は人の弁じ難き所、僅かに其の形を図(か)くのみ。詳しくは存真図を見、考ずべし)」

つまり、紙面が狭く五蔵図の全体を描くことができないので漢字で表すことにし、咽喉だけは漢字で表せないので図示することにしたという。ゆえに一見しては何を表しているのか判らないが、『頓医抄』の図(図4・5・6)と比較してみると、漢字の位置がほとんど同じであることに気づく。幻雲は「詳見存真図可考」といって、『存真図』が出典であることを明示しているから、『頓医抄』も同じく『存真図』に拠ったものといえる。幻雲は図1を「欧希範五蔵図」と題するが、やはり『存真図』から写したことになる。『欧希範五蔵図』にはおそらく数多くの蔵府図があったはずだが、楊介の『存真図』にはこの一葉しか残っていなかったのである。

(2)解説文の引用

会厭・小腸・大腸・広腸・膀胱に対する蔵府解説を引用する(蔵府解説とはいえ引用されているのは府の解説だけであるが)。

①「楊介存真図云喉応天気乃肺之系也以肺属金乾為天乾金也故天気通於肺而肺応天上連会厭会厭者五蔵音声之門戸肺属金音声応金石也」

図 4
（頓医抄）

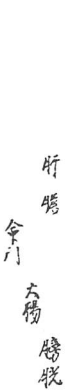

図 1
（幻雲附標）

A.『欧希範五蔵図』の比較

図 5
（頓医抄）

図 2
（幻雲附標）

B.『存真図』正面図の比較

図 6
（頓医抄）

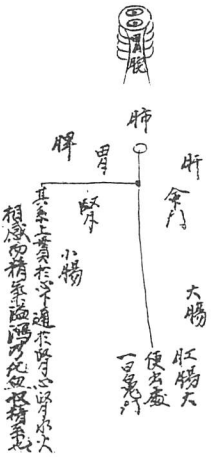

図 3
（幻雲附標）

C.『存真図』背面図の比較

②「楊介存真図小腸太陽経黄帝書云小腸者受盛之官化物出焉凡胃中腐熟水穀其滓穢自胃之下口伝入於小腸上口自小腸下口泌別而水入膀胱上口其滓穢伝入大腸上口与今所絵蔵象同」

③「存真図大腸手陽明経一名回腸以其回屈而受小腸之穀因以名之也乃肺之府也黄帝書曰大腸者伝導之官変化出焉」

④「存真図広腸又曰肛門言其処似車釭形故曰肛門即広腸也一名直腸一名魄門黄帝書曰膸腸者広腸也一名洞腸亦名肛門受大腸之穀而道出焉故魄門亦為五蔵使水穀不得久蔵」

⑤「楊介存真図膀胱足太陽経又名胞胞鞄也鞄虚空也以虚承水液焉而為津液之府類纂云膀胱者胞之室也黄帝書云膀胱為州都之官津液蔵焉気化則能出矣位当孤府故膀胱不利為癃不約為遺溺又水泉不止膀胱不蔵得守者生失守者死」

これらの五つの蔵府解説は『頓医抄』には見えない。このことからも「全部を転載した」というのは大きな誤解である。

これらの蔵府解説を援引するものは『新刻華佗内照図』だけである。[9] 五条すべてが『新刻華佗内照図』に合致するということは、『新刻華佗内照図』の他の蔵府解説も『存真図』から援引したものと考えてよいだろう。

(三)「環中図」からの引用

(1)図の引用

幻雲附標に「環中図」から図は引用されていない。

(2)解説の引用

「環中図」から次のような文章が引用されている。

①「楊介環中図、手少陰心脉、起於心中、出属心系、下膈、絡小腸、其支者従心系上、俠咽、係目系、一本作循胸出脇、其直者復従心系、却上肺、上出掖下、下循臑内後廉、行太陰心主之後、下肘内廉、少海穴也、循臂内後廉、抵掌後兌骨之端也、神門穴也」

②「幻案、臑内、環中図、手太陰肺脉下循臑内、注女到切、臂節也、臑内、天府穴也」
③「楊介環中図、手少陰心脉云〃下循臑内後廉、行太陰心主之後云〃臑内注臂節也臑内天府穴也」
④「幻案楊介環中図、戸当切、脛端也」
⑤「楊介環中図、足少陽胆与足厥陰肝合、又云足陽明胃与足太陰脾合」
⑥「都梁楊介所編環中図、手三陰三陽陽為表陰為裏、手太陽小腸与手少陰心合、手陽明大腸与手太陰肺合、手少陽三焦与手心主包絡合、足三陰三陽陽為表陰為裏、足太陽膀胱与足少陰腎合、足陽明胃与足太陰脾合、足少陽胆与足厥陰肝合」
⑦「胸会・気舎、又聖恵方環中図銅人経不載之」

①の文章は手少陰心経の流注を述べたもので、それに若干の注を付したものである。しかし『頓医抄』の手少陰心経の文章は①と異なり、やはり「全部を転載した」とはいいがたく、何に依拠した文章か定かではないが、梶原性善自身の手によって成されたとも考えられる。「一本作循胸出脇」は『甲乙経』の校語であることと、文章が『甲乙経』に最も近いことから①は『甲乙経』に拠ったものと思われる。[10]

②③④をみると注音や訓詁が施されている。ちなみに、切語の「女到切」は史崧癰疽篇音釈では「奴到切」に作り、「戸当切」は史崧邪気蔵府病形篇音釈と同じである。

⑤⑥は手足の三陰三陽の経脉の表裏関係をのべたものであるが、この内容も『頓医抄』に見えない。

⑦からは「環中図」には経穴内容もあったことが窺われる。『頓医抄』の「環中図」部分の記述は簡素で、かなり省略されているものと考えられる。当然経穴の内容は見えない。

以上のように、『頓医抄』には幻雲が引く「環中図」の内容が見えないといえる。どうみても「全部を転載している」とはいえない。

三、まとめ

以上のことから『存真環中図』と『頓医抄』の内容について次のようにいえる。

①幻雲附標所引の序文・解説・図はいずれも『存真環中図』から引用である。したがって、幻雲附標所引の『欧希範五蔵図』の図は『存真環中図』からの孫引きである。

②幻雲附標所引の蔵府図は『頓医抄』と同じものである。

③幻雲が「存真、五蔵六府図也、環中、十二経図也」というように、『存真環中図』は二部に分かれ、「存真図」には蔵府図およびその解説を載せ、「環中図」には経脈図と経脈・経穴についての記載があった。

④幻雲附標所引の「存真図」の蔵府解説は『新刻華佗内照図』の解説と合致する。

⑤渡辺の「『頓医抄』は『存真環中図』の全部を転載した」というのは大きな誤解である。転載していると考えられるのは、蔵府図と経脈図、そして序文の一部分だけである。[11]

⑥『頓医抄』の経脈図は手の太陰肺経の図に「環中図」と明記してあるから『存真環中図』からの転載とみてよいだろう。また『頓医抄』は蔵府解説や経脈解説の文章はほとんど引用していない。

【文献および注】

(1)(3)(4)(5) 渡辺幸三「現存する中国近世までの五蔵六府図の概説」『日本医史学雑誌』七巻一・二・三合併号、八八頁～一八二頁、一九五六。

(2) 前掲注の渡辺論文（一三四頁）によれば、『欧希範五蔵図』に関する記録は、『史記』幻雲附標・『頓医抄』の以外に、鄭景璧の『蒙斎筆談』・趙与時の『賓退録』・李攸の『宋朝事実』・沈括『夢渓筆談』に見られる。

(6) テキストは当研究部が撮影した写真を用いた。オリエント出版社影印本（東洋医学善本叢書第二八冊、一九九二）は落丁が

あるので資料として適当ではない。

(7) 小曽戸洋ら「月舟寿桂（幻雲）の医界における交友関係」『日本医史学雑誌』三八巻二号、七九～八〇頁、一九九二。

(8) 水沢利忠『史記会注考証校補』（巻八、九八～一〇〇頁、史記会注考証校補刊行会）。関信之ら「国宝宋版『史記』扁鵲倉公列伝における幻雲注の引用医書について」『日本医史学雑誌』三六巻一号、二三～二五頁、一九九〇。

(9) 同系の書の『玄門脉訣内照図』では、この幻雲附標所引の解説がちょうど脱落している。また王好古の『伊尹湯液仲景広為大法』にも『存真図』の蔵府解説が部分的に引用されている。

(10) ただし校語が少し異なり「一本作循胸出腸」に作る（趙府本『甲乙経』巻二十二「経脈絡脈支別第一上」）。

(11) 蔵府図を転載したといっても渡辺のいうように『環中図』の蔵府図全部ではないようだ。というのは、『新刻華佗内照図』の「蔵府内景図」と『伊尹湯液仲景広為大法』の「肺已下左側可見脾胃之所居」の両図は『頓医抄』に見えない。ちなみに「蔵府内景図」は張介賓『類経図翼』巻三の「内景図」に酷似している。「内景図」には「旧図有精道循脊背過肛門者。甚属非理。而且無子宮命門之象。皆大失也。今改正之」とあり、「旧図」とはまさにこの「蔵府内景図」（もしくはそのもとになった図）のことではないか。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究部）

An Examination of the Cúnzhēn Huán Zhōng Tú

by Kouya MIYAKAWA

A human dissection autopsy was performed in China in 1045, resulting in the production of the Oū Xī-fang Wū Zàng Tú. Subsequently, between 1102 and 1106, Yang Jie augmented this with the Cūn Zhén Tú, and combining this with the separate Huánzhōng Tú, he produced the Cún Zhēn Huánzhōng Tú. Both of these have not been preserved.

The author has re-examined these on the basis of materials (preserved in Japan) left by the 16th century figure Gen'un.

1. The material used by Gen'un was the Cun Zhēn Huánzhōng Tú, and he did not cite directly from the Oū Xī-fàng Wū Zàng Tú.

2. The drawing of internal viscera cited by Gen'un is the same as that cited in the Ton'ishō.

3. Cún Zhēn Huánzhōng Tú is comprised of two sections; the drawings and explanations in the Cún Zhēn Tú deal with internal viscera, and those of the Huánzhōng Tú with meridians and acupoints.

4. The explanatory text in the Cún Zhēn Tú cited by Gen'un accords with the citation in the extant text of the Xīnkè Huá Tuó Nèizhao Tú.

5. Kōzō Watanabe has argued that the Ton'ishō cited the Cún Zhēn Huánzhōng Tú in its entirety, but this is incorrect. Rather, the citation is only a partial one.